「広報じょうえつ」平成元年5月 15 日発行

歴史のみちしるべ ㉑

高田城下に時刻を知らせた釣り鐘

時の鐘（南本町三）

高田城下の最盛期であった松平光長の時代、寛文六年（一六六六）十一月二十一日、城下に時刻を知らせるため、「時の鐘」が設けられました。

瑞泉寺（南本町三）の釣り鐘として現存している時の鐘は、寛文九年、光長の母勝子（高田姫）が、鍋屋町（東本町五）の大鐘屋土肥佐兵衛に鋳造させたものです。高さ百三十二センチメートル、直径九十二センチメートルもある大きな鐘です。

時の鐘は、呉服町（大町二）の町年寄吉田七兵衛の屋敷に設けられました。代々の七兵衛さんが、日時計などで時刻を計って、昼夜一時（二時間）ごとに打ち鳴らしたそうです。はじめ、二回打ったり、三回打ったりしていましたが、宝暦十三年（一七六三）からは、一時ごとに三回づつ打つようになったということです。

その音は、はるか日本海にまで届いたと伝えられています。また、越後高田に過ぎたるものの一つとして、謡われています。

七兵衛さんには、藩からの鐘つき料と、町内からの役給米が、お金に換算して支払われたそうです。明治九年（一八七六）に瑞泉寺の釣り鐘となるまで二百十年間、代々の七兵衛さんは、昼夜無く時の鐘を打ち鳴らしてくれました。さぞ大変だったことでしょう。